

## 総論

# メディアとの付き合い方を考える

## 1. メディアの成り立ちから考える情報との向き合い方

佐藤 卓己

## 2. ファクトチェックは公正な情報伝達に役立つか

楊井 人文

私たちは日々の生活において、新聞・テレビ・ラジオ・インターネットなどの様々なメディアから多くの情報を得ています。特に SNS といわれるソーシャルネットワークワーキングサービス (Social Networking Service) を通じて、それらを利用する人々同士が、様々な情報の交換や交流を行う機会が年々多くなっているといえます。

パソコンやスマートフォン等の普及とともに、こうした SNS 等から手軽に情報を入手できるようになった反面、膨大な情報にいつでも触れ得ることができる環境が整っているがゆえに、情報に対する感度が知らぬ間に鈍くなっていくという危険性があるといえます。

ここでいう感度の鈍りとは、メディアから発信される様々な情報に、常に触れ得ることができる環境に身を置き続けてしまうことによって、メディアから発信されることのみが本当と捉え、メディアの俎上に上がってくる情報以外の情報の存在や、そうした情報に目を向けるエネルギーが減退していくことを表します。もう少し荒っぽい言葉でいえば、そうしたことそのものを行っていくことが、段々と「面倒」になっていくともいえ

ます。

私たちは様々なメディアと付き合い合っていく中で、こうしたメディアに上ってこない情報の存在を考える習慣と、上ってこない情報にアクセスするルートを「自ら汗をかいて」見つけていくことが、日々の生活において大事なことではないかと考えます。

技術の発達により、労力をかけず、様々なメディアを通じて多様な情報に触れることができる環境があるということは、恵まれたことではありますが、一方でその溢れる情報の波を自身で乗りこなすためには、情報を的確に理解、解釈して行動に移していくことが必要となります。

総論では、こうしたメディアが持つ特性をはじめ、メディアのあり方や受け手の情報との向き合い方について、多様な論点を提示して述べて頂きました。本号を通じて私たちの生活に大きな影響を与えるメディアのあり方や接し方について、様々な観点から考えていく一助になれば幸いです。

(本研究所研究員 片上 敏喜)